

Title	日本語主観移動表現のコーパス分析：英語との比較から
Sub Title	A corpus-based account of fictive motion sentences in Japanese
Author	小原, 京子(Hirose Ohara, Kyoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.40 (2008.) ,p.107- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20081220-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本語主観移動表現のコーパス分析： 英語との比較から

小原京子

1. はじめに

本稿は、コーパスやインターネット上のデータを題材とした、日本語主観移動表現（例：国道は山地を通る）に関する分析の中間報告である（cf. Ohara 2007, 小原 2008）。日本語主観移動表現の使用や分布上の制約について、英語の場合と比較しつつ、移動動詞の意味分類と場所を示す項の省略（いわゆるゼロ代名詞）に着目して論じる。分析の結果、Ruppenhofer（2006）の英語移動動詞の意味分類と Matsumoto（1996）の主観移動表現に関する仮説は、日本語の主観移動表現の分布や用法を十分に説明できないことが明らかとなった。そこで、イメージスキーマに基づく移動動詞の意味分類と、さらに日英両言語の主観移動表現の説明を可能とする新たな意味制約を提案する。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第2節では主観移動表現分析の意義と先行研究について述べた後で、本研究で採用した枠組みであるフレーム意味論について概説する。第3節では分析方法とその結果について述べ、第4節では移動動詞の意味分類と主観移動表現の意味的制約の観点から分析結果について考察を行う。

2. 背景

2.1. 主観移動表現

主観移動表現と言われているものには大きく分けて2種類ある。範囲占有経路（Coverage Path）表現と到達経路（Access Path）表現である。範囲占有経路表現では、主語で表されている物体の位置・範囲などが移動動詞を用いて表現される。以下の（1）、

(2) がその例である。

範囲占有経路表現

- (1) a. そのハイウェイは東京から名古屋へ走っている。
b. その山脈は南北に走っている。
- (2) a. The highway runs through the mountains.
b. The mountain range goes from Canada to Mexico.

もう一方の到達経路表現では、主語で表された物体の位置がそこへ行くための経路によって表現されている。(3) がその一例である。

到達経路表現

- (3) a. 道路を渡ったところに教会がある。
b. There is a church across the street from here.

これらの表現は主語で表された物体を認識する際に認識者の心に喚起される移動が基になっていると言われており、主観移動表現または虚構移動表現と呼ばれている。本稿では主観移動表現のうち範囲占有経路表現を取り上げ考察する。

日本語主観移動表現を分析対象とする意義はいくつか考えられる。すなわち、少なくとも1) 認知言語学、2) コーパス分析、3) 日本語におけるいわゆる名詞の省略現象、4) 類型意味論、の4つの観点からみて日本語の主観移動表現は分析対象として興味深い。

まず、主観移動表現は認知言語学的にみて面白い現象である。これらの表現では移動動詞が使われてはいるが主語で表される物体は実際に移動するわけではない。主語で表された物体との関連で主語以外の何らかの物体の移動が想定され、それが移動動詞によって表現されている。認知言語学では前述のように主語で表されている物体を認識する際に認識者の心に喚起される移動が基になってこのような表現ができるとされ、従来分析がなされてきた (Talmy 1996, Langacker 1987, Matsumoto 1996, 松本 1997)。しかしながら、特に日本語の主観移動表現における使用上、分布上の制約についてはまだよく明らかにされていない。

次に、主観移動表現はコーパスデータの分析が必要な現象である。これまでの主観移動表現の分析、とりわけ日本語の分析は内省的データに基づくものが大半であった。しかし、

「道はその畑に沿って左折してつづいている」のような表現を毎日頻繁に目にしたり、耳にしたり、自分で言ったりはしないことから考えても、作例データは自然さの点で限界がある。コーパス言語学の手法が浸透し、均衡性を持つ日本語のコーパスが研究用に使用可能となってきた今日、内省的データのみに基づいて日本語主観移動表現を分析することは不適切であろう。

第三に、日本語に多いとされる名詞の省略現象との関連からも主観移動表現は興味深い。日本語では(4b)の[]で示したように、通常の移動表現(以下では、主観移動表現との対比から「客観移動表現」と呼ぶ)では移動動詞の補語に相当する、場所を表す名詞句が省略されることが多い。

客観移動表現

- (4) a. 少年が[グラウンドを] 走っている。
b. ゼロ代名詞
私は今年も楽しく皆さんと[] 走って行きたいと思います。

主観移動表現

- (5) a. 国道が[はるか下を] 走っている。
b. ゼロ代名詞蒲田駅東口を出られますと第一京浜国道が[] 走っています。

同様に主観移動表現においても(5b)のように場所を表す名詞句が省略されることが多いと予想できるが、ここで Ruppenhofer (2006) の英語に関する考察が参考になる。Ruppenhofer によれば、英語の主観移動文では、客観移動表現と比べ移動動詞の補語が省略されることが少ないという((6), (7) 参照)。もともと英語は日本語と異なり動詞の補語が省略されることが稀な言語であるが、その英語において客観移動表現以上に主観移動表現では補語の省略が少ないというのである。

客観移動表現

- (6) a. The plane arrived [at the airport] on time.
b. ゼロ代名詞
The examiner arrived [].

主観移動表現

- (7) a. After some steep turns the road arrives [in the valley itself].

b. ゼロ代名詞

A path arrives [] from the south and is joined by a smaller one that heads down an embankment to the river east and below. (Ruppenhofer 2006: (8), (10))

果たして日本語においても客観移動表現と主観移動表現とでは補語の省略に関して差異が認められるのであろうか。

最後に、類型意味論の観点からも日本語の主観移動表現は分析に値する。Talmy (1985, 1991, 2003 (2000)) や Slobin (2004) らの研究を基盤に、日英両言語の客観移動表現にみられる対照性についてはかなり分析が進んできている (Ohara 2002, 小原 2004)。たとえば、客観移動表現に用いられる日英両言語の移動動詞を比較してみると、英語の移動動詞には「様態」に関する情報が包入 (incorporate) されるものが多い (「様態」型言語) のに対し、日本語の移動動詞には「経路」に関する情報が包入されるものが多い (「経路」型言語)。たとえば、(8a) では移動の事実を表す英語の動詞 *slid* は同時に移動の様態をも表現している。(8b) では日本語の動詞「渡った」は経路との関連で移動についての事実を表している。

(8) a. 英語：「様態」型言語

The boy slid down into the pool in just a few seconds.

b. 日本語：「経路」型言語

彼は {意気揚々と／車で／歩いて} 川を渡った。

主観移動表現においても日本語と英語は対照的であるのか、調べてみる価値がある。

以上、コーパスデータを用いて英語との比較対照の観点から日本語の主観移動表現を考察することの意義をみた。次に先行研究について述べる。

2.2. 先行研究との比較

Matsumoto (1996) は、日本語と英語の主観移動表現の双方に次のような意味的制約がみられるとしている (194: (23))。

(9) a. *The path condition*: Some property of the path of motion must be expressed.

(経路条件：移動経路のなんらかの特徴が表現されなければならない。)

- b. *The manner condition*: No property of the manner of motion can be expressed unless it is used to represent some correlated property of the path.

(様態条件：経路となんらかの相関関係がある場合にのみ移動の様態に関する特徴が表現される。)

[日本語訳は筆者]

本研究ではコーパスデータを分析対象として Matsumoto の上記二つの主観移動表現の意味的条件を検証していくことにする。

次に, Ruppenhofer (2006) はフレーム意味論の枠組みで英語の移動動詞を意味(具体的には, 英語フレームネット¹⁾で定義された意味フレーム)に基づき分類し, 英語の主観移動文には意味的制約があることを指摘した(第2.3.節参照)。本研究では日本語の主観移動文についても同様の意味的制約があるのか, だとしたら Ruppenhofer の英語移動動詞の意味分類がそのまま日本語にもあてはまるのかどうかについて, フレーム意味論の立場から考察する。

2.3. フレーム意味論

フレーム意味論とは, 言語と経験の結びつきを中心にすえた, 言葉の意味に関する理論的枠組みである (Fillmore 1976, 2006)。この枠組みでは各々の語彙項目の意味はそれが喚起する意味フレームとの関連で記述される。意味フレームとは, 「特定の状況, 物体, 出来事の型を, それらに現れる登場人物や小道具とともに示した, スクリプト(台本)のような概念構造」を指す²⁾。スクリプト(台本)に登場する登場人物や小道具に相当する, 意味フレームにおける個々の意味的要素を「フレーム要素」と呼ぶ。

フレーム意味論の枠組みを主観移動表現の分析に用いる利点としては, 動詞や動詞の項が表す意味要素をきめ細かく記述できるという点が挙げられる。また, この枠組みではその指示対象が不特定のものか, 特定のものか, あるいは構文によって同定されるかによって, ゼロ代名詞に三種類の区別を設けている。移動動詞の補語となる, 場所を表す句

1) 1997年に Fillmore らによって始められた, フレーム意味論に基づくオンライン英語語彙情報資源の構築プロジェクト <http://framenet.icsi.berkeley.edu>。

2) フレーム意味論は, Fillmore が1960年代に提唱した格文法を発展させた理論的枠組みということができるが, フレーム意味論における「意味フレーム」の概念は従来の格文法における「格フレーム」よりもずっと粒度が高く, 認知的妥当性をもったものである。

がゼロ代名詞となる場合はこれら三種類のうちの「限定指示的ゼロ表示」(Definite Null Instantiation (DNI))に相当する。

ここで例として移動に関する意味フレームである自律移動フレームをみてみよう。自律移動フレームとは、「主体が自分の意思で方向性をもって経路を移動する」状況に関する概念構造である。この自律移動フレームを喚起する日本語動詞の一つに「走る」がある。動詞「走る」は、(4)でもみたように自律移動フレームを喚起して客観移動文中で用いられる。(10)は(4)と同じ文であるが、自律移動フレームのフレーム要素である「主体」と「経路」のラベルを該当する文構成素にタグ付けしてある。(10b)では自律移動フレームのフレーム要素「経路」がDNIとなっている。

客観移動表現

(10) a. [_{主体}少年が] [_{経路}グラウンドを] 走っている。

b. ゼロ代名詞

[_{主体}私は] 今年も楽しく皆さんと [_{経路}] 走って行きたいと思います。

また、動詞「走る」は下の(11)のように主観移動文にも用いられ、補語としてゼロ代名詞をとることができる³⁾。

主観移動表現

(11) a. [国道が] [はるか下を] 走っている。

b. ゼロ代名詞

蒲田駅東口を出られますと [第一京浜国道が] [] 走っています。

3. 分析

Ruppenhofer (2006) の英語主観移動文に関する考察が日本語にも当てはまるか、Matsumoto (1996) の日英語の主観移動表現に関する制約が実際にコーパスやインターネット上の日本語例文にも当てはまるかを調べる。以下では、まず第3.1.節で分析手法

3) 本稿では客観移動表現と主観移動表現との関係は、一種のメタファー(体系的対応関係)と捉える。しかし、主観移動文における動詞「走る」は自律移動フレームとは別個の主観移動フレームを喚起するとする分析も可能である。

について述べ、次に第3.2.節で分析結果を示す。

3.1. 分析手法

Ruppenhofer (2006) の英語移動動詞の意味分類に従って日本語の移動動詞を6つのカテゴリーに分類した上で、1) 移動動詞別にみた主観移動用法の比率、2) 主観移動文中で使われる移動動詞の種類と出現回数、3) 主観移動文において場所を示す項がDNIかどうか、の3点を調査した。

Ruppenhofer の意味分類は英語フレームネットの意味フレームに基づいており、自律移動動詞 (例: *run*)、場所志向動詞 (例: *leave, cross, arrive*)、経路形状動詞 (例: *zigzag, meander*)、上下方向移動動詞 (例: *climb, descend*) の4種類から成る。自律移動動詞とは英語フレームネットに定義された自律移動フレーム (「主体が自分の意思で方向性をもって経路を移動する」) を喚起する動詞であり (第2.3.節参照)、経路形状動詞とは経路形状フレーム (「道を描写する際に、それが虚構移動すると捉え、道の形状を示すことで状況を記述する」)、上下方向移動動詞とは上下移動フレーム (「主体が上下いずれかの方向に移動する」) を喚起する動詞である。注意を要するのは場所志向動詞である。これらはさらに以下の3種類に下位分類される。出発フレーム (「主体が始点から遠ざかる」) に関係するもの、横断フレーム (「主体が経路との関連で移動する」) に関するもの、到着フレーム (「主体が終点の方向へ移動する」) に関するものの3種類である。従って移動動詞は合計6カテゴリーに分類される。以上をまとめたのが (12) である。

(12) Ruppenhofer (2006) に基づく英語と日本語の移動動詞の意味分類

(A) 自律移動動詞：自律移動フレーム (「主体が自分の意思で方向性をもって経路を移動する」) を喚起

例: *run*, 走る

(B) 場所志向動詞

1) 出発フレーム：(「主体が始点から遠ざかる」) を喚起

例: *leave*, 去る

2) 横断フレーム：(「主体が経路との関連で移動する」) を喚起

例: *cross*, 通る

3) 到着フレーム：(「主体が終点の方向へ移動する」) を喚起

例: *arrive*, 至る, 着く, 入る

(C) 経路形状動詞：経路形状フレーム（「経路を描写する際に、それが虚構移動すると捉え、経路の形状を示すことで状景を記述する」）を喚起

例：zigzag, meander, 曲がる, 蛇行する

(D) 上下方向移動動詞：上下方向移動フレーム（「主体が上下いずれかの方向に移動する」）を喚起

例：climb, descend, 上る, 下る

次に、上記 1) から 3) までの調査項目それぞれの調査方法について説明する。1) の、移動動詞ごとの主観移動用法の比率の調査には、文部科学省科学研究費特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築：21 世紀の日本語研究の基盤整備」(<http://www.tokuteicorpus.jp>) で構築中の「日本語コーパス」の 2008 年度モニター版データのうち、約 1,000 万語規模の「書籍」ジャンル全体を検索対象として用いた⁴⁾。このコーパスから上記 (12) の 6 カテゴリーに属する日本語移動動詞を含む文をそれぞれ 100 文程度抽出し、それらのうちの主観移動用法の比率を調べた。ただし、ヒット件数が 100 文に満たなかった移動動詞についてはヒットした用例すべてを用いた。

2) の、主観移動文中で使われる移動動詞の種類については、Google 検索エンジンを用いて名詞句「国道は」を主語とする主観移動文を合計 109 文抽出し、それらの文における移動動詞の種類を調べた。「日本語コーパス・書籍」を用いなかったのは、1,000 万語の規模をもってしてもこのコーパスから同じ名詞句を主語とする主観移動文を 100 件集めることが不可能だったからである。たとえば、「道が」を主語とする主観移動文は 36 例、「道は」は 29 例しか「日本語コーパス・書籍」中に含まれていなかった⁵⁾。日本語の言語学的分析においてコーパスデータと Web 上のデータとをどのように使い分けていくかについては、言語学者・国語学者・日本語学者らの関心が向けられ始めたばかりであり、まだ確固とした基準があるわけではない。これについては第 4 節で改めて触れる。

Google 検索エンジン使用に当たっては名詞句「国道は」以外にも「国道が」, 「道が」, 「道は」, 「道路が」, 「道は」などでも調査を行ったが、傾向としてはさほど変わらなかった

4) 「日本語コーパス」2008 年度モニター版データの「書籍」以外のジャンルとその規模は以下のとおりである。「白書」：約 500 万語；「Yahoo! 知恵袋」：約 500 万語；「国会会議録」：約 500 万語。

5) 「日本語コーパス」の「書籍」ジャンル内における名詞句別ヒット件数の実際は以下のとおりである（「主観移動用法の件数 / 全ヒット件数」）。「道が」：36/277；「道は」：29/277；「道路が」：7/42；「道路は」：6/47；「国道が」：4/5；「国道は」：4/6。

たため、本稿では「国道は」の結果のみについて述べる。

3) の、主観移動文において場所を示す項が DNI かどうかに関しても、2) と同様に「日本語コーパス・書籍」では十分な数の主観移動文が抽出できなかったため、Google 検索エンジンを用いた。具体的には Google を用いて主観移動文「国道が…通る」と客観移動文「…が…通る」、主観移動文「国道が…走る」と客観移動文「…が…走る」を検索し、それらにおける DNI 件数を比較した。

3.2. 分析結果

以下では、上記 1) から 3) についての調査結果を順にみていく。その際それぞれの結果について Ruppenhofer による英語の調査結果と比較対照してみる。まず、1) の、「日本語コーパス・書籍」内の移動動詞ごとの主観移動用法の比率は表 1 のとおりである。

Ruppenhofer の分析によると、英語では場所志向動詞は経路形状動詞と比べ、主観移動用法の比率が低い。日本語でも経路形状動詞と比べ、場所志向動詞は主観移動用法の比率が低いといえる。しかし、経路形状動詞の中で主観移動用法の比率にはばらつきがあり、

表 1. 移動動詞別にみた主観移動用法の比率

動詞の意味分類 (意味フレーム名)	動詞	主観移動用法数 (主観移動%)	サンプル数
(A) 自律移動フレーム	走る	2 (1.9)	101
(B) 場所志向動詞:			
1) 出発フレーム	出る	0 (0.0)	101
2) 横断フレーム	通る	4 (4.0)	100
	渡る	0 (0.0)	102
3) 到着フレーム	至る	3 (2.9)	101
	入る	0 (0.0)	101
(C) 経路形状フレーム	曲がる	3 (2.9)	101
	迂回する	6 (9.2)	65
	蛇行する	14 (77.8)	18
	カーブする	5 (62.5)	8
(D) 上下方向移動フレーム	南下する	6 (7.0)	86
	北上する	1 (1.6)	68
	上る	0 (0.0)	104
	下りる	0 (0.0)	101

表2. 主観移動文中の移動動詞の種類と出現回数

動詞	動詞の意味分類（意味フレーム名）	トークン数
走る	(A) 自律移動フレーム	29
通る	(B) 場所志向：2) 横断フレーム	29
通過する	N/A	9
向かう	N/A	5
渡る	(B) 場所志向：2) 横断フレーム	4
行く	移動フレーム ⁶⁾	4
貫く	N/A	4
離れる	N/A	4
沿う	N/A	4
過ぎる	N/A	3
抜ける	N/A	3
南下する	(D) 上下方向移動フレーム	3
横断する	(B) 場所志向：2) 横断フレーム	2
至る	(B) 場所志向：3) 到着フレーム	2
登る	(D) 上下方向移動フレーム	2
曲がる	(C) 経路形状フレーム	2

「蛇行する」や「カーブする」ではそれぞれ77.8パーセント、62.5パーセントとかなり高いが、「曲がる」は経路形状動詞「通る」よりも比率が低い。

次に、2)の、主観移動文中で使われる移動動詞の種類については、Google検索エンジンを用いて「国道は」を主語とする主観移動文109例を抽出し、それらに現れた移動動詞の種類と各々の出現回数を調べた。表2がその結果をまとめたものである。

最左列で太字で示し、中央の列で“N/A”（Not Applicable）と記した7つの動詞「**通過する**」, 「**向かう**」, 「**貫く**」, 「**離れる**」, 「**沿う**」, 「**過ぎる**」, 「**抜ける**」は英語フレームネット上の既存のどの意味フレームにも当てはまらない動詞であるが、主観移動文では比較的高く用いられることがわかった。これらについては第4節で考察する。

Ruppenhoferの調査では場所志向動詞は主観移動文ではほとんど用いられず、よく使われるのは共同フレーム⁷⁾の*lead*, 自律移動フレームの*run*, 上下方向移動フレームの

6) 「主体が始点を出発し、経路を通り、終点に到達する」状況に関する概念構造

7) 「主体（通常は生物）と共同主体（生物または無生物）の二つが始点を出発し、経路を通り、終点に達する」状況に関する概念構造

表 3. 主観移動文と客観移動文における場所の項の DNI の比率

動詞の意味分類 (意味フレーム名)	動詞	主観移動文 における Path=DNI 件数 (%)	主観移動文の (主語 = 「国道が」) 件数	客観移動文 における Path=DNI 件数 (%)	客観移動文の (主語 = 「…が」) 件数
(A) 自律移動フレーム	走る	3 (12.5)	24	10 (50)	20
(B) 場所志向動詞: 2) 横断フレーム	通る	6 (27.3)	22	10 (50)	20

climb であったが、日本語では場所志向動詞のうち横断フレームに関与する「通る」は、自律移動フレームの「走る」と同様に最もよく使われていた。

最後に、3) の、主観移動文における場所を示す項の DNI の件数に関して、主観移動文「国道が…通る」と客観移動文「…が…通る」、主観移動文「国道が…走る」と客観移動文「…が…走る」における DNI 件数を比較したのが表 3 である。

自律移動動詞「走る」でも場所志向動詞「通る」でも、場所の項の DNI の件数は客観移動文より主観移動文の方が少ない。Ruppenhofer によれば、*arrive* や *pass* などの場所志向動詞を含む英語主観移動文では場所の項が DNI となることは稀である。確かに日本語でも客観移動文と比べ主観移動文では場所の項の DNI はかなり少ないことが表 3 からわかる。一般に日本語では DNI が多いとされているにもかかわらずである。しかしながら、場所志向動詞「通る」の主観移動用法での DNI の比率は自律移動動詞「走る」のそれより高いことから、日本語では英語とは異なり、場所志向動詞の主観移動用法においてのみ DNI が少ないとはいえない。

以上、1) 移動動詞別にみた主観移動用法の比率、2) 主観移動文中で使われる移動動詞の種類と出現回数、3) 主観移動文と客観移動文における場所の項の DNI の比率に関する調査結果について述べ、英語における状況と比較した。Ruppenhofer は主観移動文における場所志向動詞の特異性に注目しているが、日本語の主観移動文においては必ずしも場所志向動詞が特別な振る舞いをしていないわけではないことが明らかとなった。また、英語フレームネットの既存の意味フレームにはあてはまらない動詞（「通過する」、「向かう」、「貫く」、「離れる」、「沿う」、「過ぎる」、「抜ける」など）が日本語の主観移動文に用いられていることがわかった。次節ではこれらの結果を基に、特に移動動詞の意味カテゴリーと主観移動表現の意味的制約の観点から考察を行う。

4. 考察

日本語の主観移動文の記述・説明には、前節でみた「通過する」、「向かう」、「貫く」、「離れる」、「沿う」、「過ぎる」、「抜ける」などの動詞の分析が必要不可欠である。表2でみたように主観移動文でよく用いられるからである。これらは意味的に英語にはないタイプの動詞であり、従って現在英語フレームネット上でもまだ定義されておらず、(12)のRuppenhoferの移動動詞の意味分類にもあてはまらない。客観移動用法において、既存の意味フレームで定義される移動動詞が「主体」対「場所」（「始点」、「経路」、「終点」）の物理的位置関係で意味記述できるのに対し、これらの動詞は客観的に存在する「指標」（Landmark）としての場所と、それとは別に「主体」自身が移動することによって形成されていく「軌道」との位置関係によってはじめてその意味を記述することができる。言い換えれば、これらの動詞は「軌道」と「指標」との相対関係（イメージスキーマ）によってその意味が定義される動詞である⁸⁾。

上記7つの動詞のうち「通過する」、「貫く」、「過ぎる」、「抜ける」の4つの動詞が喚起する意味フレームを「貫徹フレーム」と名づける。これは「主体が軌道を形成しつつ、指標とみなされるものの境界線の内側から外側へ出て移動する」状況に関する概念構造である。

「沿う」の喚起する意味フレームは「沿線フレーム」と特徴づけることができる。これは「主体が軌道を形成しつつ、細長い物体とみなされるような指標に沿って移動する」状況に関する概念構造である。

図1は貫徹フレームと沿線フレームを図式化したものである⁹⁾。(13)と(14)はそれぞれを喚起する語彙項目「貫く」と「沿う」の客観移動用法と主観移動用法の例である。

8) 意味記述（意味フレーム定義）の際にイメージスキーマが必要な動詞として、他にも「潜る」（例：この道はまもなく高速道路の下を潜った）などがある。

9) これらの意味フレームを喚起する英語の語彙項目は動詞ではなく、“go through”における *through* や “go along” における *along* のように、前置詞または不変化詞 (particle) である。



図1 貫徹フレームと沿線フレーム

貫徹フレーム

(13) a. 客観移動表現

[_{主体} 画鋏が] [_{指標} 写真を] 貫いている。

b. 主観移動表現

[高速道路が] [その地域を] 貫いている。

沿線フレーム

(14) a. 客観移動表現

[_{主体} 二人は] [_{指標} 川の流れに] 沿って歩く。

b. 客観移動表現

[この国道は] [東名高速道路に] 沿っている。

以上、日本語の主観移動表現を記述するためにはフレームネット上の既存意味フレームに基づく Ruppenhofer の英語移動動詞の意味分類では不十分で、「通過する」、「向かう」、「貫く」、「離れる」、「沿う」、「過ぎる」、「抜ける」などの動詞が定義できるような意味分類が必要であることを論じた。その際、単に「主体」と「場所」との位置関係だけでは不十分で、「軌道」と「指標」との相対位置関係（イメージスキーマ）による意味分類が必要であることを指摘した。

次に、Matsumoto (1996) の日英語主観移動表現に関する意味的制約がコーパスやインターネット上のデータを説明できるか検討する。(9) に Matsumoto の意味的制約を再度記す。

(9) a. *The path condition*: some property of the path of motion must be expressed.

(経路条件：移動経路のなんらかの特徴が表現されなければならない。)

b. *The manner condition*: no property of the manner of motion can be expressed unless it is used to represent some correlated property of the path.

(様態条件：経路となんらかの相関関係がある場合にのみ移動の様態に関する特徴が表現される。)

まず、(9a)の経路条件は、日本語と英語の主観移動文において場所を表す項のDNIが稀であることは説明できない。従って、これは「移動の**指標**が表現されなければならない」と改訂すべきである。

次に、様態条件について検討する。「曲がる」、「迂回する」、「蛇行する」、「カーブする」や *zigzag*, *meander*, *snake* などの日英両言語の主観移動文で用いられる動詞は、英語フレームネットの既存の意味フレームと Ruppenhofer の分類によれば「経路形状動詞」ということになるが、一般には「移動の様態動詞」と分類されることも多い。これらの動詞は客観移動文中では、移動中の主体自身の「様態」というよりは移動中の主体の描く「経路」(=軌道)の「様態」(=形状)を表している。従って様態条件においては、いわゆる「移動の様態動詞」の中でもこれらの「経路形状動詞」のみが主観移動文に現れることを規定する必要がある。そこで(9b)の様態条件は「**軌道の形状**となんらかの相関関係がある場合にのみ移動の様態に関する特徴が表現される」と改訂すべきである。

ちなみに、松本(1997)は範囲占有経路表現で使用可能な日本語動詞を列挙しているが、「迂回する」はその中には含まれていない(松本1997:(22a))。松本は挙げていないが「日本語コーパス・書籍」の主観移動文に実際に現れた経路形状動詞には、他にも「いりくむ」(例：駅前には広場もなく、狭い道が複雑にいりくみ、…), 「延びる」(例：街を出はずれると、波打つ稲穂の間を白い道が殆ど一直線に延びていた), 「折れ曲がる」(例：道は折れ曲がりながら、…), 「くねる」(例：…通う道はくねっている)などがある。

主観移動表現に関する意味的制約の改訂版をまとめたのが(15)である。

主観移動表現に関する意味的制約(改訂版)

- (15) a. 改訂経路条件：移動の**指標**が表現されなければならない。
b. 改訂様態条件：**軌道の形状**となんらかの相関関係がある場合にのみ移動の様態に関する特徴が表現される。

最後に、コーパス言語学の手法に関して、日本語主観移動表現の分析によって明らかになった問題点について述べる。第2.1.節で指摘したように主観移動表現はその独特の意味がゆえに、内省に基づき「自然な」例文を作例するのが困難な表現である。従って、「自

然な」用例をコーパスから大量に抽出し分析対象とすることができればありがたい。ところが、第 3.1. 節でも報告したように実際には 1,000 万語規模の「日本語コーパス・書籍」においてでさえ十分な数の主観移動文の用例を抽出するのが困難であった。この事実は、主観移動表現が比較的稀な言語現象であるだけでなく、特定のジャンル（具体的には紀行文や旅行ガイドなど）の書き言葉に集中してみられる現象であることを示唆している。

現時点での「日本語コーパス」モニター版データは合計 2,500 万語であるが 2010 年には「日本語コーパス」全体で 1 億語を超える規模の現代日本語書き言葉均衡コーパスとなるそうである。また、現在のモニター版データには新聞やブログなどのジャンルは含まれていないが、今後はこれらのジャンルも含まれるとのことである。しかしながら、代表性・均衡性をもった大規模コーパスが実現したとしても、言語事象によってはそのようなコーパスから抽出したデータと Web 上のデータとを言語分析対象として使い分けていくことが引き続き必要なのではないだろうか。今後は両者の長所と短所を見極め、使い分けの基準を設定していくべきと思われる。

5. おわりに

本稿では、日本語の主観移動表現の使用や分布に関する制約について、コーパスやインターネット上の用例を対象に英語と比較考察することにより分析した。その結果、先行研究は日本語の主観移動表現の分布や用法を十分に説明できないことが明らかとなった。そこで、イメージスキーマに基づく新たな移動動詞の意味分類と、主観移動表現における意味制約条件の改訂版を提案した。また、コーパスから調査用言語データを収集し分析を行おうとする際に留意すべき点についても指摘した。日本語は多くの場合に名詞の省略が可能な言語であるにもかかわらず、主観移動文中で名詞の省略が稀なのはなぜなのか、英語との類似点・相違点を考慮に入れつつ、今後さらに考察を深めたい。

謝辞

本研究の基となる日本語フレームネット雛形構築には、文部科学省研究費特定領域研究「代表性を有する大規模書き言葉コーパスの構築：21 世紀の日本語研究の基盤整備」公募研究としての支援を受けた（平成 19, 20 年度）。また、本研究における日英語比較対照分析には、独立行政法人日本学術振興会による平成 20 年度二国間交流事業共同研究による支援を得た。本研究で示した意味フレーム定義に関しては、平成 20 年度慶應義塾学事振

興資金による研究補助を受けた。

主要参考文献

- Fillmore, Charles J. (1976). "Frame semantics and the nature of language." In *Annals of the New York Academy of Sciences: Conference on the Origin and Development of Language and Speech*. Vol. 280: 20-32.
- Fillmore, Charles J. (2006). "The Articulation of Lexicon and Constructicon." Plenary Lecture at the Fourth International Conference on Construction Grammar (ICCG4). September 3, 2006. The University of Tokyo, Japan.
- Langacker, Ronald W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 1, Stanford: Stanford University Press.
- Matsumoto, Yo. (1996). "Subjective motion and English and Japanese verbs." *Cognitive Linguistics* Vol. 7, No. 2, 124-156.
- 松本曜. (1997). 「空間移動の言語表現とその拡張」. 田中茂範・松本曜著. 『空間と移動の表現』 125-230. 研究社出版.
- Ohara, Kyoko Hirose. (2002). "Linguistic encodings of motion events in Japanese and English: A preliminary look." 『日吉紀要英語英米文学』 第41号, 122-153.
- 小原京子. (2004). 「移動の様態の日英比較」日本英語学会第22回シンポジウム『移動表現のタイロロジー』 コンファレンスハンドブック 22: 139-142.
- Ohara, Kyoko Hirose. (2007). "A Corpus-based Account of Fictive Motion Sentences in Japanese FrameNet." Poster presented at the 10th International Pragmatics Conference (IPrA10). Gothenburg, Sweden. July 12, 2007.
- 小原京子. (2008). 「コーパスに基づく日本語主観移動表現のフレーム意味論的分析：英語との比較から」. 『日本認知科学会第25回大会発表論文集』 16-17.
- Ruppenhofer, Josef. (2006). "Fictive Motion: Construction or Construal?" *Proceedings of the 32nd Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*.
- Slobin, Dan I. (2004). "The Many Ways to Search for a Frog." *Relating Events in Narrative*. Vol. 2. Sven Stromqvist and Ludo Verhoven. New Jersey, Lawrence Erlbaum Associates: 219-257.
- Talmy, Leonard. (1996). "Fictive motion in language and 'ception'". In *Language and space*, eds. Paul Bloom, Mary A. Peterson, Lynn Nadel and Merrill F. Garrett, 211-276. Cambridge, MIT Press.
- Talmy, Leonard. (2003 (2000)). *Toward Cognitive Semantics*. Cambridge, MIT Press.